
幻想精霊戦記チェルレイン～セリディール大陸・10年前エピソード～

milki_asamia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想精霊戦記チエルレイン〜セリディール大陸・10年前エピソード〜

【Nコード】

N3251N

【作者名】

milkiasamia

【あらすじ】

遙か光の神と呼ばれた幻想の大陸である『セリディール大陸』で10年前

『泉の精霊チエルレイン』様が『水の妖精・ビラフェリー』と合流し共に歴代魔王を討伐してきた『女剣士ラリア』似会うため旅をしてみました。

しかし、精霊の森に危機が迫っている中『泉の精霊チエルレイン』様と

『水の妖精・ピラフェリー』は精霊の森へいったん戻りました…
そこには大量のモンスターが
彼女2人は 行く手を阻む魔物たちとの戦いで体力が付きそうにな
っていました。

第1章 水の妖精と女剣士（前書き）

今回は初投稿ながらも幻想精霊戦記チエルレイン
セリデール大陸・10年前エピソードになります。

途中 おかしいところもありますが私並にちよくちよく書き入れま
した。

少しずつある意味で楽しんでくださると幸いです。

第1章 水の妖精と女剣士

精霊の森 中央

「お姉様、このままでは危険です、退きましよう」

「ビラフェリー、駄目だわ、。完全に包囲されたわ」

約2800匹のモンスターが集まる中2人は包囲されてしまった。

『泉の精霊チエルレイン』様は 覚悟を決めながら究極の魔法を繰り出そうとしていた。

「!?!?! だめです お姉様その魔法はっ!?!」

「・・・この方法しか助からないのですよ、あの数のモンスターの中であなたはどうか切り開くのですか？」

「そ・それは・・・でもその魔法は危ないです、命落とすんですよ!?!」

「・・・ごめんなさい、でも覚悟はしています あなたを助かるなら私は・・・」

「いや!?! だめですっ お願いだからやめて下さい、お姉様」

『水の妖精・ビラフェリー』は『泉の精霊チエルレイン』様を止めようとしてました。

ですが・・・もう究極の魔法は打ち放されるばかり 相当・・・大量の数のモンスターに打とうとしているのでしょうか。

「ビラフェリー あなただけでも かならずや『女剣士ラリア』に会って そして・・・」

「光の神と呼ばれた幻想の大陸・セリディールを救ってください・・・」

「!・・・お姉様!!」

究極の魔法は大きく放たれ 約2800匹のモンスターが集結した
全てを飲み込み吹き飛ばし消しました。

しかし・・・『泉の精霊チエルレイン』様は究極の魔法のせいで力
尽きて倒れたか意識を失われてしまいました。

「い・・・いやあああ!!!」

『泉の精霊チエルレイン』様の姿を見て泣き叫んだ『水の妖精・ビ
ラフェリー』

彼女は『泉の精霊チエルレイン』様の姿のショックに泣きくれてし
まったようです。

そして 一週間が経ちました。

『水の妖精・ビラフェリー』は聖なる教会オペロリアへ行き
『泉の精霊チエルレイン』様を天へと導く儀式を行いました。
彼女は『泉の精霊チエルレイン』様が天界でも幸せになるようお祈
りしました。

「・・・お姉様、私きつと 『女剣士ラリア』様を探し この大陸
を救ってみせます。」

聖なる教会オペロリアを後し、進み始めた。

『水の妖精・ビラフェリー』は

あれからいくつのも試練を乗り越え進みました。
一人では辛い思いをした経験も積み重ね 引きたい時もありました。
しかし、彼女はくじけず前へと進みました。
水の妖精として負けない心が大きく強く感じます…。

それから・・・1ヶ月がたった。

首都カクタウス

セリディール大陸で最も主の首都

世界中の冒険者たちが集まるといふ歴もあつた街

『水の妖精・ピラフェリー』は手掛かりを探すべく
カクタウスギルドを訪問する事にした。

『カクタウスギルド長・ラルネ』はこの街で最も冒険者に好かれる
科学的な顔つきをしたおじさんである。

カクタウスギルド

「こんにちは、どなたかいらつしやいますかあ？」

周りはシーンとしていた、お留守のような雰囲気だった。
その時、足音が2階の方へ聞こえた。

「おや？ 誰だい？」

ちよつとクールなお姉さんが2階へ降りてきた
感じとしてはボーイッシュな雰囲気である。

「あ、こ・こんにちは」

「よく見れば妖精族じゃないか、珍しい事もあるもんだねえ」

「は・はい(汗)」

『水の妖精・ビラフェリー』はクールなお姉さんの前で緊張してしまつたようだ

そして、ちょうどギルド長である『ギルド長・ラルネ』も戻つてこられた。

「んん？ おやあ？ 妖精さんがいるのではないか この街じゃ珍しいな」

「あ、はい、こんにちは。」

流石にギルド長も妖精姿では驚いたようだ。

「それで？ うちのギルドに何か用かね？」

「『女剣士ラリア』様を探しに求められたのですが、ご存知ないでしょうか？」

「人探しか、ならばそこに居る」

ギルド長はすぐに指差した

ビラフェリーはきよとんした顔でみてみた。

「え？」

「うちを探してたのか!？」

「・・・は？」

あまりにも驚いたせいか お顔が(・ワ・;)な感じになつてしまつた。

なんと、クールのお姉さんが『女剣士ラリア』だった。

『水の妖精・ビラフェリー』は『女剣士ラリア』に今までの事話した実はちょうど『女剣士ラリア』も『泉の精霊チエルレイン』様の事も知っており

話から聞いた時も彼女も相当驚いた表示をした。

「まさか、チエルレイン様がね・・・」

「ええ、お会いしてどうにか、この大陸救ってほしいと・・・」

「それでうちを探して・・・」

彼女たちの会話は夜へと続いた。

そして『水の妖精・ビラフェリー』はこの街のギルドに一時期所属した

そんな中、夜にカクタウスギルド宛に依頼が届いた。

『カクタウスギルド長・ラルネ』は依頼書を見た

依頼書にこう書かれていた

どうやら首都カクタウスに『月光帝国ヨルカ軍』が攻めてくるらしい監視していた騎士団からの情報によれば 夜に他の街を襲っているらしい。

約 村と街を含め26件も侵略して来た夜の軍団として有名
今回はその軍団が大軍を率いれて首都カクタウスを襲うらしい。

しかも カクタウス城のお姫様 ユイ!!カクタウス姫を捕える計画との情報も得た

本陣であるカクタウス城が主に防衛戦になるとの依頼書であった。

『女剣士ラリア』と『水の妖精・ピラフェリー』は今回の以来の件を引き受けてくれた。

「ユイ様をさらって何をしようとするんだ、あいつら……」

「カクタウス城 私も頑張って防衛します。 お姉様 『泉の精霊チエルレイン』に誓って。」

2人は今晚に備えて準備をし始めた。

場内の作戦も出席し ボニッツ「カクタウス王の指示で

2人はエスマールン騎士団長と共に行動した。

「今回の防衛戦、期待してますよ ラリア ピラフェリー」

二人は勢い元気な返事でさ早速配置に取り掛かった。

第1章 水の妖精と女剣士（後書き）

次回は月光帝国ヨルカ軍との戦いになります。
設定は：まあ頑張って考えて作ります。

第2章 月光帝国ヨルカ軍・カクタウス城防衛戦

『水の妖精・ビラフェリー』と『女剣士ラリア』は
『カクタウス騎士団長・エスマールーン』と共にカクタウス城の防衛に備えた

そして ついに 月光帝国ヨルカ軍が首都カクタウスに攻めてきた

首都カクタウスの門番として配置された兵士も率いれたヨルカ軍兵士たちによりあっけなく一掃された。

首都カクタウス一般の民も安全なところへ全て避難し首都カクタウスが
一時的に戦場となってしまうた。

月光帝国ヨルカ軍の兵士たちは各部隊に分かれ、民家や店を襲い始めた。

燃え盛る炎と共に月光帝国ヨルカ軍の戦争行動が始まったのである
本陣であるカクタウス城で防衛メインと配置された

『水の妖精・ビラフェリー』と『女剣士ラリア』は荒らされた民家や店を見て

悲しい思いになってしまったが 前々からこうなることは承知であり
今回の戦いは必ずや勝ってみせると心に誓った。

カクタウス城 王座

王座へ駆けだしてきて報告しに現れたのが城の兵士であった

「ボニッツ王、月光帝国ヨルカ軍が我が城の門まで進軍してきました。」

「ふむ、わかった、各兵士と將軍らは月光帝国ヨルカ軍を一掃しながらこの城を守り続けてくれ」

「我が城は簡単に落ちるわがないっ！　こころしてかれよ！」
「はっ！！」

『ボニッツⅡカクタウス王』の令により兵士たちも若き上昇のようだけれど、『ボニッツⅡカクタウス王』はなぜ我が娘を狙っているのかが分からず今でも考え込んでいるようだ

「月光帝国ヨルカ軍め、何故わしの娘　ユイⅡカクタウス姫を狙うんだ、理解できん！」

月光帝国ヨルカ軍がついに城侵入を許してしまった

防衛配置されていた2人も行動開始した

「御姫様を守るため　絶対にとおしませんっ」

「何人兵士がこようがうちの實力みるがいい。」

『水の妖精・ピラフェリー』と『女剣士ラリア』が戦闘開始した。
月光帝国ヨルカ軍の兵士は武将も含め　150000体という大軍である

こんな大軍で城は守れるかちょっと不安になるが　戦略によっては大軍でも勝てる方法はある

今の状況、雰囲気からして　互角な戦いが続く

『エスマールーン騎士団長』は城に侵入した敵兵士たちの状況を見て騎士団の兵たちをうまく動かしていた

「月光帝国ヨルカ軍は夜に強い軍団だ、夜明けまで耐える方法しかない」

騎士団長は普通に冷静な判断で答えてはいたが 今の状況、耐えられるかが問題である。

戦争が始まって2時間経過

キン カン キン カン パキン グサツ ドカ！！

闘いの効果音の音が城全体に響く中
戦争はまだ終わらない。

そんななか 一部の月光帝国ヨルカ軍の兵士らも戦いに巻き込まれながら

カクタウス城の王座までやってきており『ボニッツカクタウス王』も負けずとして

数人の敵兵士たちもなぎ倒して続いていた。彼の剣術としては見事な腕前であった。

「わしもずっと剣術にこだわってた 我が娘を守るためにな！！」

『ボニッツカクタウス王』も怪我押しながらも 戦い続けていた、相当まだまだ体力はあるようだ

カクタウス城 姫の部屋

『ユイ』カクタウス』 姫は窓から戦争状態の姿を眺めていた
姫も不安と気持ちに閉ざされ色々悩んでいた

そんななかカクタウス城に雇われているメイドさんが声かけてきた

「如何ですか？ ユイ姫様」

「ええ、今回の戦争で…私狙われているんですよ」

「はい。」

「でもどうして私を狙うためにこんなにめちゃくちやにしないといけないんですか!？」

「私、全くわけがわからないです、そんなことで戦争するなんて。」

姫様は涙流しながら くだらない戦争の事で ほとんど暗い気持ちになっってしまったようだ、

「お気持ちはわかります、ですが、あなたはこの城で一番魔力を持っているお姫様」

「あなたが狙われるのも無理もないです、ですが彼ら軍団諦めるまで戦い続けるしかないのです」

「もう少しの辛抱です お願いします。」

「……。」

メイドさんは優しい語りで姫様を慰めた それでもまだ城ないと街の中の戦争は続いていた。

カクタウス城 王座

ついに月光帝国ヨルカ軍の兵士を率いれた將軍もついに王座まで現れた

王座まで追い詰められた『ボニッツⅡカクタウス王』はピンチの中
その時

『水の妖精・ビラフェリー』と『女剣士ラリア』そして
『エスマⅡルーン騎士団長』も加勢に上がってきた

どうやら今の敵兵士の数ではカクタウス城の兵士も足らずだったよ
うだ。

「ボニッツ王！」

「エスマ　そして妖精に剣士も・・・すまぬ・・・」

「うちらが王座の範囲守ってやるよ　こんどこそひめさまはわたさ
ない！」

「ごめんなさい、王様　力不足で」

「いいんだ、兵士不足だったのが悪いんだ」

王座の範囲が既に月光帝国ヨルカ軍に包囲された

包囲されて　3時間　ビラフェリー達はいよいよ体力も尽きてきた
夜明けまでカクタウス城が落とされるのも時間が間に合わない

月光帝国ヨルカ軍達は一気にそう攻撃してきた時だった

「おねがいですっ　やめてくださいっ」

声かけてきたのは『ユイⅡカクタウス姫』だった、
敵兵士や将軍たちも一時的動きが止まった

「お願いです、私をとらわれるという事はわかっておりました」

「ですが、街や城を荒らすために　私を捕える目的だなんておかし

いです」

「そんなことまだ続くのであれば 私こそ居なくなるかとらわれた方がましだと思いました」

今の発言『ボニツツ』カクタウス王』も驚いた。

「何を言っただ我が娘 お前がいなくなったら私は!!!」

「お父様、ごめんなさい でもみんなが戦争せず無事にいればいいのです」

姫様も泣きながら語った 王座の周りにはどんーんと空気が流れ込み流石の敵兵士と将軍も
今や攻撃仕掛けてこなくなつた。

「だから、せめて最後の力を出して戦争終わらせませす!!!」

『ユイ』カクタウス姫』が不思議な力を出した

その時気付いたのが 『水の妖精・ビラフェリー』はあの時

『泉の精霊チエルレイン』様が出した魔法とよく似た事に気付いて
声を出した。

「!...だめです!!! 姫さま、その魔法は!!!」

「ん? どうした妖精よ」

「あれは、私のお姉様 泉の精霊チエルレインが使っていた究極の魔法!!!」

「な・なんじゃと!?!」

間違いなく『ユイ』カクタウス姫』が出している魔法は『泉の精霊チエルレイン』様と同じ

あの究極の魔法だった たとえあの魔法 王座の周りで使ってしまった

つたら

城ごと吹き飛ばされるにきまつている 『ボニッツカクタウス王』もこの魔法の事はよく知っており

止めに入った さらには

『水の妖精・ビラフェリー』と『女剣士ラリア』そして

『エスマルーン騎士団長』も『ユイカクタウス姫』も止めようとしたが

出している魔法の力に身動きが取れなくなった。

『ユイカクタウス姫』は魔法を放たれる前にこう王様に語った。

「お父様、ありがとうございます これも今まで悩んだ末選択でした メイドさんも同じように止めようとしてたけど」

「皆の気持ち受け入れなくてごめんなさい…」

悲しみにあふれた言葉に 『ボニッツカクタウス王』も涙を流した。

「娘…すまぬ…もっと大切にやりたかった…」

「いいえ、お父様 私は十分お父様の気持ちに受けいられる事ができて幸せです。」

『ユイカクタウス姫』の優しい笑顔と共に究極の魔法は放たれた

魔法の威力の範囲に呑みこまれる敵兵士と将軍はあつという間に姿を消した

『水の妖精・ビラフェリー』は『泉の精霊チエルレイン』様と同じ事が起きてしまったと思い

涙が出てしまった 『女剣士ラリア』はそっと『水の妖精・ビラフェリー』に慰めた。

そして魔法の威力はおさまり 『ユイ』カクタウス姫』はその場で倒れてしまい帰らぬものになってしまった。

ちようど夜が明け月光帝国ヨルカ軍の城外に居る兵士らも街から撤退し始めた

しかしカクタウス城は城は守られても姫様を失った事で暗い雰囲気にとどまってしまうた

次の日 カクタウス城の出入りは一時期禁止されてしまった

今回の件で『カクタウスギルド長・ラルネ』に報告し 一息はついたが

これから『水の妖精・ピラフェリー』はどうすればいいか自分も悩み始めたようだ。

月光帝国ヨルカ軍の防衛戦がおえて2カ月がたった

『水の妖精・ピラフェリー』と『女剣士ラリア』はセリデール大陸を救うため更に旅に出る事になった。

次の目的は 魔法首都マーバリウエスの マーバリウエス城である。『ユイ』カクタウス姫』と『泉の精霊チエルレイン』様が使っていた究極の魔法を詳しく聞き出すために

向かうのであった。そして 次の朝 首都カクタウスを後にした。

第2章 月光帝国ヨルカ軍・カクタウス城防衛戦（後書き）

次回は 魔法首都マーバリウエス向かうためエピソード進めます。
月光帝国ヨルカ軍側の別エピソードもいずれは作る予定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3251n/>

幻想精霊戦記チェルレイン～セリディール大陸・10年前エピソード～

2010年10月9日12時28分発行